

ゴルフフィッティング アイアン編

5000人を 教えた男

6



佐藤一郎の感性と理論のフィッティング

今回は「ゴルフフィッティング」のアイアン編です。

まずテーマを「ちゃんと打てるアイアンを見つける」ということにします。来店されるお客様とお話しするとアイアンの選定には意外と無頓着です。何を基準に使いやすいアイアンを見つけたらいい

かがはつきりしない方が非常に多いことに驚かされます。

そこで私からテーマを提案していただきます。それが「ちゃんと打てるアイアンを見つける」です。ゴルフフィッティングではお客様の考えていることを伺うことから始めます。そこで「ちゃんと打つ」とはど

ういうことか？ そしてそのためにはどうスイングしているのか？

と、いうことを最初に聞き、実際にやっていただきます。今自分の持っている7番アイアンを使ってソールにシールを貼り、アクリルボードの上にボールをのせ何球か打って頂きます。(写真



写真1

1) うまく出来ない方の大半は、ボールのここを見てうまく払おうとします。(イラスト1)

そのような考えで打っている方の多くは、トップしたりダフったりと安定したインパクトができていません。そこでドライバーの時と同じように知識の是正です。アイアン、FW、UTなど地面にあるボールを正確にインパクトするには下向きの入射角度が必要だと言つことです。(イラスト2)

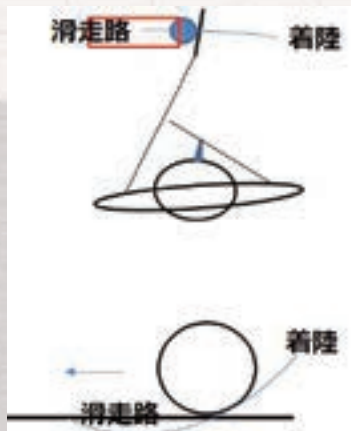


イラスト2



イラスト1

地面にあるボールは、着陸の動きでなければ正しくインパクトはできません。そして着陸する時の滑走路はボールの前です。ボールの後ろに滑走路があつては正しい着陸はできません。ダフリです。まずは着陸する。

そしてその滑走路の一番右端にボールを置くことで、滑走路は必然的にボールの前になっていくと

いうやり方で始めます。

初めからボールの前の芝を削ることをやるうとすると、着陸はスムーズにできません。滑走路の位置はスイングでも変わります。ライでも変わります。ボールの位置ありきでゴルフをしないようにすると、驚くほどよいスイングが身につくようになります。そして、着陸動作を目標動作（するべきスイング）として、フィッターにバトンタッチです。

「ちゃんと打つ」とは？」

クラブの機能としては、総重量を感じ、それを利用して着陸動作をしてもらいます。つまりこのクラブフィッティングは、着陸動作がしやすい重量を見つけることが重要なのです。

フィッティングでは、3種類の総重量の異なる7番アイアンを用意してスイング、着陸動作を行います。カーボンシャフトでは60〜80gの3種類、スチールシャフトでは95〜115gの3種類で対応します。

重さは下に向かう動作をしている時は味方ですが、最下点近くで

入射角を鈍角に払おうとすると途端に敵になってきます。

着陸がクラブの重さを利用してできるようになってきたら、次はソールに貼ったシールについての跡を確認します。（写真2）

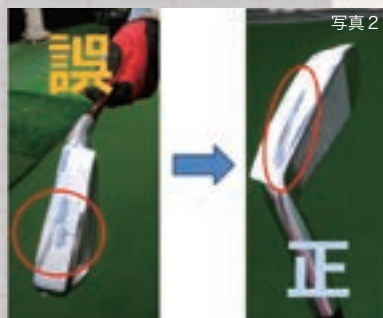
写真左のようになっていることが多いので、写真右になることをデモしてお客様に提示します。そして自分の跡のつき方の着陸方法を説明し、理解したら、お手本のよきな跡になるためにどうしたらよいかを伝えます。

正しく跡がつくにはドライバー編でやった「重さを消す」動作が必要で、ヒールから着地してトウ寄りがつくよう回転していく着陸動作を練習します。L字型クラブを使ってソールシール・アクリルボード打ちを練習してみます。

このゴルフフィッティングのアイアン編では、クラブの重さを利用して着陸動作をできるようにすること、重さを消す動きでソールシールに正しい跡がつくよう練習することで「ちゃんと打てる」アイアンを獲得できます。

総重量が決まったら7番アイアンで打ったボールのインパクトデータから最適な口フト角度のヘッ

写真2



ドモテルを選定します。29〜33度の範疇で飛距離性能ボール初速、打ち出し角度、スピン量）を見極め、必要があればライ角度も調整します。7番アイアン中心に下は何番まで必要か、上は何番まで必要かを見極めU丁の守備範囲（口フト角度による本数）とウェッジの守備範囲（口フト角度による本数）を決めます。

今、検証中のフィッティングがあります。ウェッジで実際にやっていますが重量配分の変更です。バッテリーフィッティングで行うカウターバランスの調整からヒントを得たもので、手元寄りの動きやすさが変わります。次回はバッテリーをご紹介したいと思います。

フィッティングとはFeelとRealのギャップを埋めること

先にも述べましたが、近年のフィッティングにおいてアナライザーの存在は大変重要です。かつてクラブ性能についての計測器しかなかった時代はプレイヤーのFeelがすべての指針だったので、技術レベルの高い人しか「打ちやすいクラブ」を入手できなかったと私は思っています。その理由はRealを表すデータが計測できなかったからです。クラブ製作側が考えるバランス理論や振動数理論にしても、クラブスペックの数値が元となって構築されたものです。そこから結論づけられるFeelはプレイヤーから発信されるFeelとはかけ離れたものが多かったのです。

バブル期を境にRealを数値提示できる測定機器がどんどん開発されました。ヘッドスピード測定器を手始めにインパクト前後のクラブの動きが数値化できるもの、さらにはヒットされた

ボールのフライトデータも測定できるようになりました。するとFeelとRealのギャップは急速に埋まってきました。「打ちやすいクラブ」より「振りやすいクラブ」の発見が可能となったのです。

「振りやすいクラブ」は質の高いインパクトを安定的に実現できるだけでなく、プレイヤーに「クラブはこう振るんだよ」と語りかけてきさえします。ゴルフフィッティングでは「クラブをこう振る」ということをまず初めにお客様に提供（スイングフィッティング）し、その動作をした時「振りやすい」と感じる（Feel）クラブを提供する（クラブフィッティング）という手順で行います。振りやすいと感じるFeelと満足できるインパクトの質Realが一致するフィッティングこそが、プレイヤーの求めるものだと思います。

佐藤一郎（さとう・いちろう）

1954年6月生まれ、東京都出身。筑波大学大学院スポーツ経営修士卒。1986年（社）日本プロゴルフ協会入会。故チャック・キャンベルプロに師事、ゴルフプロフェッショナルとしての資質を学ぶ。クラブに関してはライベア、クラブデザイン、フィッティング&フィッター養成など行なう。スイングに関しては百貨店の主催するゴルフスクール用教材の開発、ウェットソフトアナライザー開発、パソコン通信でのレッスンなど幅広く活動し、プロ活動30年を機に自らのレッスン手法「3Sゴルフ理論」を確立した。その他、筑波大学大学院にてスポーツマーケティングを学び卒業後ゴルフコースの再生ビジネスに従事した。近年はキネシオロジーをゴルフ指導に生かす研究をしている。